

めて、すもうをとらせたりしました。神経痛しんけいつうの足をさすりながら、行司ぎょうじをする四郎は、子どもにもどったようでした。

尾道へ来てからは、あまり柔道の話はしなくなりました。武道としての水泳についても、ほとんど語りません。しかし、ひとり静かに、庭で弓をひく四郎の姿を見た人は、昔の武士の姿を感じさせられました。

大正十一年（一九二二年）十二月二十三日、武道ぶどうできたえぬかれた西郷四郎のからだも、だんだんひどくなる神経痛には勝てず、ついに五十七年の生涯しょうがいをとじました。

悲しみの知らせは、各地にとび、長崎では、鈴木天眼てんがんが東洋日の出新聞に、かなしみの文章を書きました。

東京の講道館では、翌年よくねんになって、嘉納治五郎かのうじごろうが、今は亡き西郷四郎に、六段の位を特別にさずけて、その功績こうせきをたたえました。